

学会ハイライト

第81回日本皮膚科学会東京支部学術大会 を終えて

(平成29年11月18日(土), 19日(日), 京王プラザホテル)

末木 博彦

昭和大学医学部皮膚科学講座 教授

はじめに

平成29年11月18日(土), 19日(日)に京王プラザホテルを会場として第81回日本皮膚科学会東京支部学術大会を開催させていただきました。東京支部学術大会はこれまで毎年2月に開催されてきましたが, 日本皮膚科学会事務局に運営事務局を担当していただけるようになり, 今年度から3月の法人決算に間に合わせるために遅くとも12月中旬までに開催することになりました。台風や大雪の心配はありませんが, 学会シーズンたけなわの時期であり, 2月に第80回が盛大に開催されてから9カ月後という時期でもあり, 多くの会員の皆様にご参加いただけるかが非常に心配でした。当日は全国から2,750名のご参加をいただき, 盛会のうち

に閉会することができました。ご参加いただいた皆様, ご協力, ご支援をいただいたすべての関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます(図1)。

本学術大会のテーマ

「躍進する皮膚科学—軸足を治療へ」をテーマとさせていただきました。「躍進」には当教室の主要な研究テーマの1つである「薬疹」を掛け言葉としました。近年, 皮膚疾患に対する新たな治療薬が次々と開発され, 治療の選択肢は大幅に広がり, まさに「皮膚科治療の時代」を迎えております。患者さんからも病名・病態を明らかにするだけでなく, より有効で安全な治療を求める声が高まっています。私どもの昭和大学は創立者の上條秀介博士が関東大震災の折り, 混乱する医療現場で実際



図1 学術大会会場の外観



図2 好評を博したJonathan Batchelor先生による企画講演「皮膚科診療で使う英語表現」

の治療に役立つ医師が少ない現状を憂い、「至誠一貫」の精神のもと、医学・医療の発展と国民の健康増進に真心をもって寄与する人材を養成することを建学の精神として開校された経緯があります。私自身これまで建学の精神に反し病態解明に傾倒し、治療学に興味を持ってきませんでしたが、この機会に進歩した治療手段をどのように活用し、どうすれば患者さんにその恩恵を最大限に提供できるかについて会員の皆様とともに学び直したいと考え、このテーマを選ばせていただきました。ポスターやプログラムの表紙にも治療に関連する器具をデザインいたしました。

基調シンポジウム

基調シンポジウムの1として「わが国の皮膚科治療の進歩と将来展望」を企画いたしました。大雪に見舞われた第77回東京支部学術大会で企画された「日本の皮膚科治療は世界水準といえるか？～他国の状況を知り、日本の治療事情を考える～」の続編であり、この4年間にわが国で新たに導入された治療、進歩がみられた治療を各治療の第一人者の先生方に総括していただき、近未来の展望についてもご紹介いただきました。基調シンポジウム2として「薬疹する皮膚科学」を企画しました。これまでの研究成果を総括し、将来展望について

気鋭の先生方にご講演いただき、塩原哲夫先生には生物学的製剤やチェックポイント阻害薬など、免疫環境に変化を及ぼす新薬の登場によってもたらされた薬疹研究のルネッサンスともいえる状況について熱く語っていただきました。

招待講演・特別講演

招待講演1としてスイス、チューリッヒ大学皮膚科Lars French先生に、近年わが国でも関心を集めているautoinflammationについて最近の知見をお話いただきました。それほど一般的な疾患ではないこともあり、当科の医局員20名以上は興味深く拝聴したとのことでしたが、全体の聴衆の数はいま一つのようなでした。翌日の招待講演2はBritish Journal of Dermatologyでclinical trialのsection editorを務めておられるJonathan Batchelor先生に皮膚科の臨床試験論文の評価のポイントなどを講演いただきました(図2)。Batchelor先生は2002年9月から1年間当科に留学されていたことから日本語に堪能で、すべて日本語で講演していただきました。ご本人は日本を離れて15年が経過したため、日本語での講演はだいぶ緊張され負担が大きかったそうです。やはりどの言語でも使っていないと忘れていくということを痛感いたしました。臨床試験は研究者向きの



図3 2部制で行われた「皮膚病理道場への登竜門」

テーマであったためか聴衆が少なかったのが残念でした。Batchelor先生には企画講演2として「皮膚科診療で使う英語表現」をお願いしましたがこちらは大盛況でした。日常診療での英会話にすぐに役立つ貴重な内容で好評を博しました(図2)。

特別講演は慶應義塾大学先端医科学研究所細胞情報研究部門教授の河上 裕先生に、近年注目を浴びている免疫チェックポイント阻害薬の展望、とくに個人差の大きい免疫状態に合った個別化治療、複数のポイントを制御する複合免疫療法についてお話をいただきました。

兵庫医科大学医学教育センター客員教授の高橋 優三先生には医療における人工知能(AI)の現状と未来像についてご講演をお願いしました。そのきっかけは「人工知能時代の医療と医学教育」と題する高橋先生の著書の中でAIが発展しても昭和大学の建学の精神である「至誠一貫」は色褪せることはないとの記述を読んだことでした。

シンポジウム・ワークショップ

学会テーマに関連して治療に関するシンポジウムを多く企画しましたが、私がとくに力を入れたのは「実は身近にある免疫再構築症候群(IRIS)」と「デルマドロームをデルマドリームへ繋げよう！スマホを持って参加しよう！」の2つでした。前者は薬剤性過敏症症候群の病態研究において非HIV感染者にもIRISと同じ病態が認められることからスタートしております。皮膚科にかぎらず多くの

診療科が関連することから、感染症内科、呼吸器内科、リウマチ膠原病内科の先生方にも参加を呼びかけ、多くの参加がありました。本シンポジウムを契機として「非HIV感染者の免疫再構築症候群研究会」を立ち上げることになりました。

後者は私が従来からデルマドロームにも疫学的エビデンスを導入したいと考えていたことからシンポジウムを企画いたしました。開催1年前からEBMにお詳しい日本医科大学千葉北総病院の幸野健教授をはじめ、デルマドロームに造詣の深い先生方にご参集いただき、2回の準備委員会を開催しました。デルマドロームは米国のKurt Wiener先生が作られた術語ではありますが、日本で醸成され、根付いてきました。「曖昧さを含むが夢がある」「EBMには馴染まない」「皮膚科医の矜持である」などの意見が大勢を占め、上記のようなタイトルになりました。田中勝先生のご尽力でアナライザーを用いて参加者の意見を聞くこともできました。デルマドローム研究に望むこととしては、ガイドライン作成を望むというご意見が40%、デルマドローム研究会の開催が34%と多い結果でした。

melanomaのセンチネルリンパ節転移陽性例への早期廓清の有効性を評価するMALT-II試験結果が報告され、早期廓清群と経過観察群でmelanomaによる生命予後に差がないとの結果でした。この情報をどう解釈し、今後の治療方針をどうしていくべきかについて気鋭の専門家5人から活発



図4 懇親会風景. 昭和大学応援指導部によるパフォーマンス

なご議論をいただきました。

ハンズオンセミナー・道場

今回は開催時期が結婚式シーズンであったことから、低層階の会場をすべて使用することができず、不足分は42階の会場を使うことになりました。移動の不便さを考慮して、このフロアをすべてハンズオンセミナー・道場に使うことにしました。乾癬性関節炎の触診法、真菌検査法、プリックテスト、フットケア、糖尿病性潰瘍の免荷法の5セッションのほか、毎回好評を得ているダーモスコピーと皮膚病理の教育道場も開設いたしました。皮膚病理道場では電子機器を用意し、バーチャルスライドファイルをみながら所見を確認していただけのようにしました。これらのセミナー・道場は機器等の設備が必要なため、事前登録制といたしました。ほとんどのセミナーが事前登録で満

員になりました。同内容を2回行っていただいた皮膚病理道場の安齋眞一先生、福本隆也先生をはじめチューターの先生方にはあらためて感謝申し上げます(図3)。

多くの会員の皆様にご参加いただけたことは主宰者として望外の喜びではありますが、今回は治療をメインテーマにしたこともあり、サイエンスよりもプラクティスに偏り過ぎた傾向があります。懇親会において島田眞路理事長からのご指摘がありましたように海外招待者の講演や基礎的なサイエンスに関するセッションへの参加者が少なかった点が残念でした。昨今の研修医制度、専攻医制度の影響もあり、専攻医の研究離れ、大学院離れの傾向が今後進行することが懸念されます。本学会の中にも専攻医の興味を引き、サイエンスの魅力を感じとれるような企画を増やしていく必要性を感じました。